

未来を生きる子どもたちへのメッセージ ④⑩
『祭りを学ぶ 一尾張津島天王祭一』

五年ぶりの尾張津島天王祭が行われます。たくさんの提灯を飾る5艘の巻藁舟（まきわらぶね）による宵祭と絢爛豪華（けんらんごうか）な能人形や水引幕をのせた6艘の車楽舟（だんじりぶね）による朝祭が天王川公園の丸池で行われます。中世の絵巻物語に出てくるようなお祭りです。

この祭りは室町時代にはすでに始まっており、六百年以上も続いているお祭りです。祭りの始まりには、三つの説があります。一つ目は南北朝時代に南朝方にたった津島の武士たちが、北朝方の台尻大隅守を舟遊びに誘い出し、打ち取ったことに始まるという説です。車楽舟という名前も「台尻討ち取ったり」から付いたのでないかと考えられます。二つ目は「神葎（みよし）流し神事」で病気をもたらず神を天王川に流し、祭礼を行ったという説です。三つ目は植物の葎（よし）に神を迎え、無事に一年が過ごせるように水害防止などを願い、暑い夏を乗り切ろうとする「神迎（かみむか）え」の行事であるとする説です。市江（市江祭と言われてきました）では牛頭天王（ごずてんのう）が皆の前にあらわれ、疫病（えきびょう）を抑えるために祭りを行えと言ったという説もあります。

この祭りは津島五カ村（米之座・堤下・筏場・下構・今市場）と市江（東保・荷之上）の人たちによって行われてきました。津島の五カ村は津島の街中、本町筋の両側に広がった街で、この町に長く住まないで祭りに参加できませんでした。流す神葎は天王川から佐屋川へ、さらに伊勢湾にたどり着きました。織田信長・豊臣秀吉・尾張徳川家の厚い保護を受けました。江戸時代につくられた『大日本神事見立角力』では津島祭は、大関の祇園祭（京都）・天満祭（大阪）、関脇の宮島祭（広島）・御斎（伊勢）、小結の日光御祭礼（日光）・金毘羅祭（讃岐）に続き、東の前頭（全国七番目）の祭りとなっています。歌川広重をはじめ、多くの浮世絵師たちがこの祭りの様子を描きました。日本三大川祭り（大阪・天神祭、広島・厳島管弦祭と並び）の一つに数えられ、国の重要無形文化財、ユネスコの無形文化遺産に登録されています。

津島市教育委員会は「柔軟な頭と心を鍛える」「自分の命を守る」と並び、「郷土津島を愛する津島プライド」を大切にしたいと思っています。そのため「津島の達人ジュニア検定・選手権」「尾張津島天王祭り絵画コンクール」「津島カルタ選手権」と共に「祭りを学ぶ」学習会を今年度も実施します。

令和5年7月10日
津島市教育委員会
教育長 浅井厚視